

市立函館病院は手術支援ロボット「ダヴィンチ」を導入

市立函館病院は昨年9月、ダヴィンチによる初の手術を直腸がんで成功させた。ダヴィンチのメリットは傷が小さく、出血も抑えることができ、手術後の回復が早いこと。同病院では消化器外科に続き、呼吸器外科、婦人科、泌尿器科でもダヴィンチの手術を開始した。

市立函館病院副院長

中西 一彰



国インテュイティブサージカル社が1999年に開発した医師の手術を支援するロボット「ダヴィンチ」は精緻な低侵襲性手術をより安全に提供できることから道内でも導入する病院が増えている。市立函館病院は昨年9月、ダヴィンチによる初の手術を直腸がんで成功させた。道南でダヴィンチを導入しているのは函館五稜郭病院と同病院だけだ。

同病院が導入したダヴィンチXiは第4世代にあたる最新鋭機。ダヴィンチは数カ所の小さな穴からカメラや鉗子などの手術器具を挿入し、術者は3Dモニターを見ながら手術をする。体への負担の少ない手術が大きな特徴だ。「当院では手術を執刀する医師や麻酔

科医、看護師、臨床工学技士などによるワーキンググループを立ち上げ、ミーティングや運用面でのシミュレーションを重ねてきました」。導入が正式決定後は北大や弘前大などでダヴィンチ手術を見学するなど新しい技術を吸収してきた。

グループリーダーの中西一彰副院長は北大卒業後、同大学第一外科（消化器外科）に入局。道内の関連病院や国立がん研究センター研究所（肝がんの研究）、北大病院などを経て、2016年市立函館病院へ赴任した。日本肝臓学会専門医・指導医、日本肝胆膵外科学会評議員・高度技能指導医などの資格を有し、肝胆膵領域、特に肝臓を専門とする外科医だ。

ダヴィンチのメリットは傷が小さく、出血も抑えることができ、手術後の回復が早いこと。複数の関節構造を持つ鉗子は人間の手より可動域があり、手振れを補正する機能を備えている。一方、鉗子類には触覚がない。「視野外で鉗子シャフトが臓器圧迫をきたしてもその感覚はなく、臓器損傷には最大の注意を払う必要があります」。さらに医師であれば誰でもダヴィンチを使って簡単に手術ができるわけではない。製造元であるインテュイティブサージカル社の定めるトレーニングを終了し、認定資格を取得した医師だけが執刀できる。

ダヴィンチの登場以降、十分な開腹手術と腹腔鏡手術の経験を積む前にロボット手術を行う事例もあるようだ。「外科学会でも議論されていること

ですが、消化器外科では開腹手術と腹腔鏡手術の経験の先にあるのがダヴィンチです。ダヴィンチ手術中にアクシデントが発生した場合、開腹が必要になることがあるからです。当院では大腸がんの手術が多いので、開腹、腹腔鏡ダヴィンチそれぞれに適した症例などを組み合わせ、成長過程の若手医師を教育していきます」。同病院では消化器外科に続き、呼吸器外科、婦人科、泌尿器科でもダヴィンチの手術を開始した。中西副院長は「道南でも最先端のがん手術を提供できる病院が増えたことを知ってほしい」と話している。



手術支援ロボット「ダヴィンチ」のメリットやデメリットについて説明をする市立函館病院の中西一彰副院長